朝日新聞　2022年（令和4年）8月30日（火）　第3種郵便物認可

天気の仕組み「寺子屋」で学ぶ

気象庁出身の古川さん　メカニズム知って冷静に避難

元気象庁予報課長の古川武彦さん(82)が28日、古河市で「気象寺子屋」と名付けた防災講座を開いた。一人ひとりが気象予報や台風の仕組みを知ることで、防災につなげる狙いがある。古川さんは、この取り組みを広げたいと考えている。

「これが昔よく使っていた水銀気圧計。こっちはアメダス観測所にある雨量計です」

古河市の西牛谷集落センターで28日、小学生15人を含む45人の参加者を前に、古川さんが機器を見せながら、その使い方や気象データの見方を解説した。

古川さんによると、上空の気温や湿度を観測するために気球につけて飛ばす「ラジオゾンデ」という機器は使い捨てで、1回につき3万円ほどの費用がかかるという。国内ではつくば市を含む16カ所で毎日2回打ち上げられている。「年間では億単位の費用になります」と語ると、会場はどよめいた。

台風を説明する際は、気象衛星「ひまわり」が撮影した画像を使いながら、台風の定義や高気圧と低気圧の意味を丁寧に伝えた。台風をフィギュアスケート選手のスピンにたとえ、「台風の目は、遠心力が働いて、中心に風が吹き込めなくなってできる」と説明した。

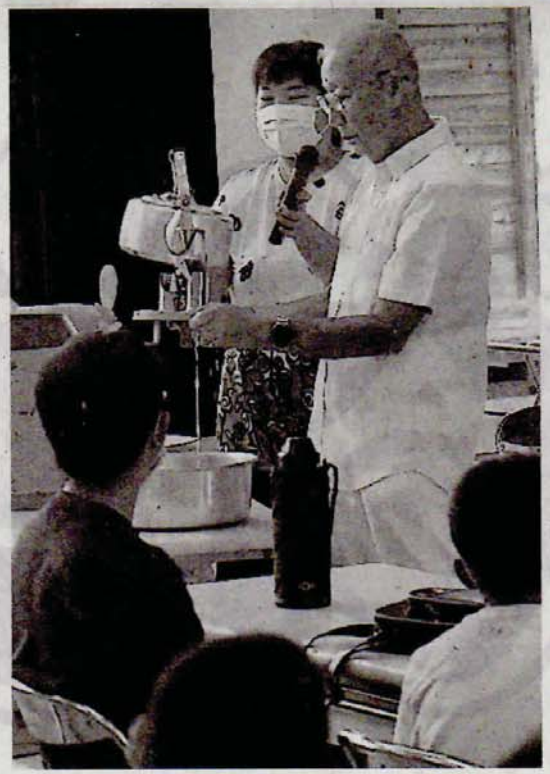
ペットボトルを使って雲を作ったり、コップで大気圧を感じたりする実験も披露した。参加した古河市の小学4年宮崎聡一さん(10)は「飛行機で台風の目に入って撮影した写真を見て、自分も台風の目に入りたいと思った」と話す。祖父とテレビの天気予報を見る時間が好きだという。

古川さんは昨年10月12日付の本紙オピニオン面「私の視点」に寄稿し、「気象についてのより深い理解と実践的な取り組みが必要だ」と指摘して、気象寺子屋の構想をつづった。

7月に潮来市で初めて同様の講座を開いた。古河市での講座は市議で、子どもたちに科学の楽しさを伝えている「総和おもしろ科学の会」事務局の長浜音一さん(71)に声をかけられ、同会主催の形で実現した。

古川さんは「自治体から避難指示などが出された時も、メカニズムを知っていればより冷静に動ける」と語った。

古川さんは鹿嶋市在住で、要望があれば、今後も気象寺子屋を開きたいという。問い合わせは古川さん（090・9004・8738）へ。（西崎啓太朗）



水を注いで雨量計の仕組みを解説する古川武彦さん（右奥）＝古河市西牛谷